

十二月の購入図書

一般図書

- 愛児の名前のつけ方 北川鉄齋
人間として女性として 羽仁説子
ドナウの彼方で 藤本ますみ
性格と職場適応 横田澄司編著
現代史の死角 上前淳一郎
血痕 冤罪の軌跡 鎌田 慧
現代文化人類学 石川栄吉編
余暇と青少年 瀬沼克彰
続・夫と妻のための老年学 水野 肇
日本の婦人問題 村上信彦
折形の礼法 山根章弘
日本のおどり 中山義夫
アインシュタイン 中村誠太郎編
噴火と大地震 木村政昭
天気図と気象の本 飯田睦治郎編
雲 内山龍雄
相対性理論入門 村山定雄「共」著
星座への招待 村山定雄「共」著
ヨーロッパ 野の花の旅 安野光雅
ヨーロッパのあみもの 雄鶏社
寝たきり老人の家庭看護 家の光協会編
日本茶の伝来 松下 智
ティーロードを探る 福山俊翁「共」著
禅画の世界 福山俊翁「共」著
墨絵彩色入門 峯岸巍山人
モダンジャズ入門 岸浪洋三
音楽鑑賞入門 ジョン・D、ホワイト
阿波と淡路の人形芝居 久米惣七
日本の民画 内田静馬
ひとすじの青春 中条一雄
飛鳥大和の巡礼 栗田 勇

近代こけしの郷愁

- 音楽展望 山中 登
原稿の書き方 吉田秀和
手紙タブー集 竹俣一雄「共」著
ことばの作法 天沼 寧
日本語の愉しみ 外川滋比古
方言の息づかい 楠本憲吉
日本語の語源 川崎 洋
口から出まかせ 田井信之
鼻 藤本義一
山がそこにあるから 水上 勉
会津八一の世界 田中澄江
金曜日の夜 宮川寅雄
蒼茫の大地滅ぶ(上・下) 山口 瞳
西村寿行
伸子 高橋揆一郎
秋風日記 福永武彦
剣客商売 春の嵐 池波正太郎
閑閑 夏樹静子
水の肌 松本清張
死 顔 中村真一郎
冬の蟬 杉本苑子
日の影村の一族 五木寛之
高浜虚子 富士正晴
万葉の人々 犬養 孝
遅咲きの梅 津村節子
四季の記憶 円地文子
珊瑚 新田次郎
パリの憂愁 河盛好蔵
明治俳壇史 村山古郷
江戸文学問わす語り 円地文子
孤独の夜のスコア 田辺聖子
蜂の記憶 渡辺淳一
ロシア、シヨーク集 原 卓也編著
外四十七冊
児童図書 問所ひさこ
ばたばたすりっば

ぼうしぼうし

- どうぶつえんのピクニック 神崎利子
川はながれる ロベル・アーノルド
へんな動物 ランド・アン
へんの十どん ガーグ・ワンダ
うちがいっけんあったとき かこさとし
クラウス・ルース
コンサイス学習人名辞典 三省堂
とんちなぞなぞ 民話研究会編
ひげものがたり 折井英治
川・池の生物 菅野 徹
学習慣用語辞典 大村はま
アンネの青春ノート フランク・アンネ
みどりの川のぎんしよきしよき いぬいとみこ
外 二〇冊 灰谷健次郎
一般図書 二五九冊
児童図書 三五冊
計 二九四冊

一坪図書館の

図書交換

山梨県立図書館では、一坪図書館の配本図書の交換をいたします。今後とも益々ご利用の程ご案内いたします。

交換日 昭和五十四年一月十七日
三月 六日

交換場所 文化会館前広場
一坪図書館名 本光寺、共栄館
広教寺、福源院、宝鏡寺



近世(3)

こうしたなかで武田氏のほろんだ三月末には早くも北条氏勝が、郡内に侵入して徳川方の入部するのをまかまき兵力をたくわえながら勝山城にいたといわれ(宝鏡寺文書)北条氏が郡内に向けた期待は何であつたらうか、郡内を手にすることから甲斐国にかけたおもわくの足場としての意義は大きかつたのではなからうか。

甲斐国一円があわただしい空気のなかで天正十(一五八二)年六月三日、織田信長は京都の本能寺の宿営で家臣の明智光秀によって殺された。この報が甲斐国に伝えられると信長の家臣で甲斐国を支配していた河尻鎮吉は悪政のかぎりをつくしたという人物であつたから民衆のいかりにふれ、この人たちがたちあがつて河尻をおそい甲斐の岩窪において殺されるといふ事件がおこり、武田氏の滅亡のうみがこめられたといえる。

このため支配者を失つた甲斐国はふたたび身近かに争乱の大きなうずの中にまきこまれていった。これよりさき徳川家康は三月二十五日に甲府にて甲州は平岡七之助、郡内は鳥居彦右衛門に支配をまかせていたというが、情勢が大きくかわつたので甲斐国にのみをかけていた駿河の北条氏政、氏直の父子は家康との抗争の地となり家康は新府に陣をかまえ、鳥居元忠は府中に陣をかまき若神子(須玉町)にいた氏直と対陣したが兵力にとほしい徳川方は武田の遺臣たちをとりあげ、この武士たちを保護するといふ口実にして兵力の増強をはかつて戦果をおさめたといわれ、北条勢は八月二日の御坂の黒駒にある藤木の「幻の御坂城」を根拠にして八〇日にわたる対戦がつづいたという。この時に田辺佐左衛門は彦右衛門の兵力が少ないので敵しがたいことを知り、彼は策を案じて甲州小屋あがりの武士をあつめてこれにあたり北条勢を敗走させた(奥 隆行氏文書)この時の元忠の兵力は侍大将を合せて三〇騎、雑兵六〇〇といわれたが、小屋あがりの武士をあつめても二〇〇にはなからなかつたがよく北条勢の大軍を敗走までもちこみ三〇〇を討ちとつたといわれ、元忠の軍略は地の利をえたものといえようか、ここで北条氏と和睦ができて郡内へ引あげたといふが郡内になだれこんで本國へ引きあげたのではなかつたか。

こうして甲斐国は家康の御料地となり元忠は正式に郡内領をたまり北条氏に備えて谷村城(勝山城)にいらることになったのが一五八二(天正一〇)年十一月ではなからうか。

羽田 富士男

鳥居 鳥居
鳥居彦右衛門